

# 敬老精神

「敬老の日」から「老人の日」へ

「敬老の日」(九月の第三月曜日)は、日本では国民の祝日である。祝日法改正(ハッピーマンデー制度二〇〇三年)によって、かつて「敬老の日」だった九月一五日は、「老人の日」となり、同日より一週間は老人週間となっている。「敬老の日」の始まりは、一九四七年に兵庫県の野間谷村(現在の多可町八千代区)で定められた「としよりの日」(九月一五日)だとされる。「老人を大切に、年寄りの知恵を借りて村作りをしよう」と、農閑期で気持ちのよい季節に敬老会を開いた。これが兵庫県から全国に広がった。祝日法

高齢期の社会における位置づけは、時代の変化やそれにもなうライフスタイルの変容、さらに地域の文化的背景などにより多様である。日本発の記念日「敬老の日」の名称も、「母の日」などとは違い他国ではみられないという。文献から過去を紐解くとともに、海外の事例を通して、高齢者と共に過ごす時間について考える。

では、「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う」ことが目的とされている。これは、ライフスタイルの変化によって、村から都市へ移動する若者世代が増加し、高齢者と共に過ごす時間が減少しつつあるという認識に基づくものであったかもしれない。二〇〇三年のあらたな呼称「老人の日」は、「国民の間に広く老人の福祉についての関心と理解を深めるとともに、老人に対し自らの生活の向上に努める意欲を促す日」と説明されており、「ケアの対象としての高齢者」および「高齢者の自助や自己形成」を謳っていて、社会の少子高齢化のもとで高齢者福祉が課題となっている

ことが示唆されている。

## 近代以前の人生区分

高齢期の社会における位置づけは、人生区分に関する思想にも表現されてきた。一六世紀西洋では「人生の階段」という形式をとる図像が登場した。たとえば近代教授学の父とされる一七世紀のコメニウス「人間の七つの年齢段階」(『世界図説』)は若い世代を頂点とする階段の図であるが、高齢者はその右端から離れて立ち去って行くように描かれている。それは、次の世代に重なりつつ生かされるライフサイクルに包摂される人のイメージではない。

六〜七世紀セビリヤ司教イシドルスの「人間の年齢について」(『語源』)には、人生区分はもとより語彙に考証が展開されていた。七〇歳以上が「元老」、五〇歳から七〇歳は熟年期で、「成熟した判断力においてもつとも熟した年齢」。「人生の成熟期」とされている。他方、二八歳から人生の半ばころの三五歳を経て四九歳まで続く若者期は、「雄牛のような力」をもつことにより、ようやく「人を助けることができる」ようになる時期にすぎない。遡って、治療活動の出発点として人間の自然性を考察した紀元前五〜四世紀ギリシャのヒポクラテス「箴言」では、「季節に関していえば、

春と初夏は、子どもと若者もつとも元気で健康であり、夏と秋のころまでは老人が、また晩秋と冬には中年の人がもつとも元気で健康である。」と環境や季節などマクロコスモスと呼応する人生が語られていた。

## 位置づけの変化

だが、近代以降の人生区分表現を辿ると、若者期の縮減と老年期の権威失墜が顕著になってくる。シェークスピアの『お気に召すまま』の人

デッキでの食事は知人、友人、近所の人が「ポットラック」で楽しむ時間である。北国のカナダでは、寒い季節でも、ロウソクやランプの灯のもとに集う。家のなかを通らずに参加できるので気楽に招待しあうことができる(この日は南仏風のテーブルクロスで。モントリオール 2003年9月)

「人間の七つの年齢段階」(『世界図説』)

## 大切にする気持ち

「敬老の日」は日本発で、日本以外の国々にはないとされている。確かに、毎年訪ねているアメリカ合衆国、カナダ、デンマークでは、そのような記念日はみあたらない。「敬老の日」について質問すると、「母の日」や「父の日」の話をする人がほとんどだ。カナダの友人は、もつとも近い日として「祖父の日」をあげたが、高齢者を大切にする気持ちは、年金、運賃や医療費における高齢者用の設定などによって常に表現されているという考えを述べていた。デンマークに関するデータによると、親と同居している割合は日本より低くても、親を訪

ねる頻度は高い。記念日に限らず退職後の人びとの生活を考えたり、交流しようという生活スタイルは、同居するか否かということよりも、世代間の関係性を考えるうえで重要な観点であろう。

ここ数年、高齢者が住みやすい街としてデザインされたライフケア・コミュニティを、カナダやアメリカに訪れている。夕方からの食事会に招かれて出かける親たちや友人・知人たちがやってきていることも多い。それぞれが料理やスナックをもちよる「ポットラック」のガーデンパーティーに、庭の垣根の向こうから近隣の人びとが加わることも珍しくない。こうした気楽な集まりは、退職後の人びとが日常生活において交流する賑やかな機会となっている。海の向こうのあらたな知人たちとの夕食会に小さなアペリティフを加えようと、わたしは毎回「かりんと」や「あられ」など駄菓子で膨らんだ不思議なトランクを抱えて旅立つ。近年、老人の孤独死をきっかけとしてパリで始まった「隣人祭り」は、一年に一度、戸外の長テーブルに料理をもちよる隣人がおしゃべりする機会を作ろうというのだが、急速に世界の多くの都市に広がりがつつある。家族に限定されない人びとの交流は、誰にとつても、新しい楽しみを運んでくるに違いない。

